

# デザインする街—3

## 伝統と革新が 共存する街〈日本橋〉

旧五街道の起点であり、日本の商業・経済の中心地として栄えてきた日本橋は、今なお多くの老舗が健在ぶりを発揮し、また、長い歴史を物語る史跡や貴重な建造物が大切に保存されています。その一方で、リニューアルによって斬新な姿に様変わりしている建物もあり、まさに新旧が入り交じって共存し、日本橋にしかない景観を創り出しています。そこにあるのは官・民・地元が一体になった長期スパンの街づくり。今号は、新生・日本橋の魅力を探ります。

日本橋から室町方向を見る

NIHONBASHI





# 日本橋再生計画

日本の“ところ”と“わざ”の再生と創造

中川俊広  
TOSHIHIRO NAKAGAWA

「特集3」 デザインする街 3

日本の競争力再生のために“都市再生”が謳われて久しい。世界の都市間競争の中、アジアの諸都市が圧倒的なパワーとスピードでその魅力を増してきている今、日本の首都である東京の街づくりが、相変わらずのアメリカ追随型でいいわけがない。永く人と資本を惹き付ける都市は、街そのものがその固有の歴史と文化を体現している。戦後断ち切られた日本固有の精神性、文化性を、現代の街づくりの中で再生していくことが求められている。

文化が経済を再生させる時代。その歴史と現存するコンテンツに鑑みると、再生の旗手として日本橋ほどふさわしい街はない。

日本橋街づくり推進部。三井不動産が初めて街づくりのための部門を設けた。それまでの、どんなに巨大なプロジェクトであれ自己完結する開発とは一線を画す、新しい目線だった。

開発を事業サイドからではなく街サイドから見る。事業部最適ではなく街最適の視点で見ると、開発内容や開発

手法は変わってくる。ステークホルダーは増えるが、中長期的に街に与える効果が格段に大きくなる。そもそも開発以外にやるべきこともいっぱい見えてくる。

## NIHONBASHI

では街とはいったいどういうものか。街は、内側から見れば、暮らし働く人たちの生活の場＝日常。外側から訪れる人にとっては、さまざまなものとの出会う場＝非日常。そして内と外が交じり合うことで多様なヒト・モノ・コトが行き交い、さまざまな機能が複雑に影響し合って相乗効果を高め、絶えず代謝する有機体、それが“街”だ。

街の魅力が高ければ、日常と非日常はしばしば反転する。来訪者のもたらず新鮮な感覚は、暮らし働く人に刺激を与え、迎えてもてなす人々の細やかな心や所作は、家族のような表情で来訪者を包む。

江戸時代、世界一の繁華を誇った日本橋も、近年は衰退の一途を辿っていた。かつて先進的、革新的であったからこそ永く繁栄してきた街が、その強

なかがわ・としひろ—三井不動産 日本橋街づくり推進部長/1956年生まれ。1979年、横浜国立大学経営学部卒業。同年、三井不動産入社。2005年から現職。日本橋エリアの再開発、街のプロモーションを地元や行政との共同体制で推進中。

みの本質を忘れてしまったが故の停滞。しかし、歴史は後からではどんなにお金をかけてもつくり出せない資産。街には魅力的なシーズが幾つも埋まっている。地元の街づくり団体の活動もしっかりしている。一から新しい街を生み出すわけではない。この街に眠るものを活かそう、風を吹き入れる仕掛けをして内外が交じり合うようにしよう。「残しながら、蘇らせながら、創っていく」。

2004年3月、東急百貨店跡地に開業した「COREDO日本橋」は再生へ大きく舵を切ったプロジェクトとなった。不足していた先端高機能オフィスの供給により、流出がちであった大企業本社を呼び込むことに成功。また常に新しい知の創出と発信に期待し、早稲田大学大学院ファイナンス研究科を誘致した。低層階の商業テナントは、従来の日本橋を訪れる顧客の幅を拡大し、中央通りの「三越」と「高島屋」を結ぶ回遊性の創出を目指すもの。「三越新館」のオープンと「高島屋」のリニュー

ールが続き、再生への動きは確かなものになった。

2005年は新しく誕生したランドマーク「日本橋三井タワー」を軸に、“日本橋再生計画”をメディアに積極的に発信した。「日本橋三井タワー」は行政諸機関の理解と協力なしには実現しなかったプロジェクト。残すべきものとしての「三井本館」を保存し、「三井記念美術館」の開設により文化・エンターテインメント機能を蘇らせ、これまで日本橋にはなかったが現代の都市には不可欠なハイエンドのホテル「マンダリン オリエンタル 東京」の誘致によって社交機能を担う場を創り出す。

日本橋再生計画の情報発信のフックとなり、街のプロモーションに大きな役割を果たしたのは、半年間の期間限定情報発信施設としての「三井越後屋ステーション」。従来型の開発の発想の枠からはみ出すこの施設は、北山孝雄氏や相羽高徳氏、地元の老舗店舗やボランティア、その他さまざまな力を結集して実現できた。約100坪のスペースしか持たないこの施設が、半年間で50万人の来場者を獲得した。ここで“蘇らせた”のは江戸時代の三井越後屋呉服店の外観だけではなく、顧客の気持ちに通じた往時の商いの先進性そのものだ。

このように街づくりは機能更新プロジェクトとしての個々の再開発だけではなく、期間限定のイベント的なものであっても、街そのものの地熱を上げるプロモーションが加わることで大きな効果を上げる。

「日本橋三井タワー」に続くインパクト・プロジェクトとなる室町東地区開発計画は、2012年度に全体竣工を予定している長期案件である。地元の長



中央通り 右から日本橋三井タワー、三井本館、三越。その先が日本橋

年の努力により、「日本橋」を覆う首都高速道路の地下移設についても具体的方法論が示された。エリアのエネルギーや活性度を上げ続けていくことが、再開発事業のポテンシャルアップのためにも重要となる。

「日本橋再生計画2006-2007」では、12月に「室町福徳塾」をオープンさせた。「エンジン01文化戦略会議」[\*]の協力の下、平成の寺子屋として幅広い領域の専門家が、日本や日本橋の文化・伝統についてセミナーを開催する。

更に「三井越後屋ステーション」の跡地に、半年間限定でプラネタリウムとカフェ、一時託児サービスを持つコンビニを備えた複合施設を開設した。プラネタリウムは、日本橋再生計画と共に「『新日本様式』100選」にも選出された大平貴之氏の「メガスターII」を用い、世界的演出家の宮本亜門氏の演出による葛飾北斎を題材にした映像エンターテインメントで、まさに“JAPAN VALUE（日本固有の価値）”

を象徴するもの。3月には「Japan Fashion Week」を日本橋に誘致する。東京コレクションの開催地として、新日本様式を世界に発信するのに日本橋ほど適地はない。

日本人は今一度自らが持っていた世界に誇るべき精神性（もてなしの心、文化や美意識）と、卓越した技術を再確認する必要がある。銀座は日本市場向けの舶来品売場の様相を呈している。日本橋では日本の“ところ”と“わざ”を再構築して、世界市場向けの日本売場を目指したい。

ただ、歴史に培われた伝統的な文化だけが“JAPAN VALUE”ではないという認識も必要かもしれない。世界に類を見ない文化への許容力と包容力が促進する多様性の発露、それを日本人の感性で美しく消化した街。日本橋の懐は深くありたい。\*

[\*] エンジン01（ゼロワン）文化戦略会議 各分野の表現者・思考者たちが、日本文化の更なる深まりと広がりを目指して参集したボランティア集団



日本橋地図（イラスト：一色九月）



中央通り 八重洲通り交差点から高島屋、COREDO日本橋を見る



# 日本橋地区の都市再生事業

柳沢博美  
HIROMI YANAGISAWA

「特集3」 デザインする街 3



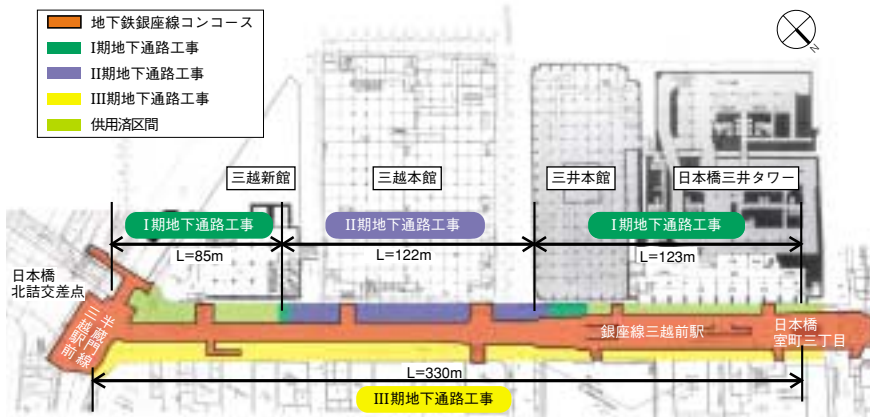
日本橋

国土交通省東京国道事務所では、日本橋地区において、江戸時代に我が国諸街道の起点に定められ、現在も「日本国道路元標」が埋め込まれている「日本橋」を中心に、国道1号、4号、15号などを管理し、現在、以下の事業に取り組んでいます。

## 1. 日本橋地区都市再生事業



日本橋三井タワー付近地下道



一体整備計画平面図

東京駅からも比較的近く、地下鉄の駅も集中する日本橋。近年では、景気低迷と同時に地盤沈下も進み、かつての賑わいが失われつつあった日本橋地区の都市再生を支援するため、道路空間を有効活用し、民間の沿道施設と一体と

なって歩行者空間ネットワークを創出していくのが「日本橋地区都市再生事業」です。既にI区間を供用し、現在II区間の整備を進めています。本事業のポイントは以下の3つです。

### 地元・民間と力を合わせた一体的な整備

地上、地下の道路空間と民間の沿道施設を一体的に整備し、賑わいのある都市空間を創出します。民間と協働で空間整備、利活用の検討を行い、回遊性の高い、魅力あふれる日本橋地区を地元と力を合わせながら構築します。

### 快適な歩行者空間ネットワークの創出による地域連携

もっと地域に愛され、そして訪れた

やなぎさわ・ひろみ—国土交通省関東地方整備局東京国道事務所 副所長/1952年生まれ。日本大学卒業。1970年、建設省(現・国土交通省)入省後、相武国道事務所、道路部、横浜国道事務所などを経て、現職。

くなる道へ。歴史的な街並みや地元特有の文化を活かし、歩行者環境や景観などに配慮した快適な歩行者空間ネットワークを創出。地域間の連携を深めながら、交流を広げます。

### 地域活性化を高める 連続的な歩行者動線

本事業のポイントは連続的な歩行者動線を形成するところにあります。これにより東京駅、八重洲地区と日本橋周辺地区との連携が強まります。同時に利用者の回遊性が高まり、地域の活性化を実現していきます。

## 2. 「日本橋」の保存と管理



日本橋の現地調査

現在の「日本橋」は、明治44年(1911)に石造りに架け替えられ、「日本国道路元標」が設置されるなど、日本の道路の起点として、また、平成11年5月に国道の道路橋としては初めて国の重要文化財の指定を受けました。そして、都民の生活や産業、経済を支え続け、社会的な価値を持続しながら現在に至っています。

しかしながら、橋本体が一世紀近い歳月を経て石造本体に亀裂などの傷みが見受けられる状況となっていることから、平成17年の12月27日に「日本橋

の保存と管理に関する検討委員会」を設立し、「保存と管理」を中心に「歴史・文化」、「石造技術の保存と伝承」の3つの視点を相互に関連させながら、これからも道路構造物として良好な状態を保ちつつ利用され続けられるよう、適切かつ効率的な維持管理の在り方について検討を行っています。

## 3. 中央通り照明灯更新 …銀座・京橋・日本橋/中央通り照明デザイン国際競技



最優秀賞受賞作品 松井淳+桜沢拓也(代表:松井淳)

日本橋、京橋、銀座地区を貫く中央通り(一般国道15号他)の照明灯は、明治7年に設置されたガス灯から始まります。現在の照明灯になってからは、既に40年近くが経過し、現行の耐風基準には適応しないため、また老朽化が進んでいることから、早急にリニューアルする必要が生じています。新しいデザイン選考にあたって、平成18年6月より実行委員会を組織し、「銀座・京橋・日本橋/中央通り照明デザイン国際競技」を進めてきました。6月15日より公募を開始し、日本を含む世界18カ国から、280もの作品(海外からの応募は53作品)が提出され、9月より始まった1次選考、2次選考で5作品に絞り込みました。この5作品に対して



中央通り 三越前から三井本館、日本橋三井タワー。その先がJR神田駅

公開展示・一般投票/ホームページ投票を行っています。11月17日には、作者による公開プレゼンテーション・最終選考会が行われ、一般投票/ホームページ投票の結果と合わせ審議されました。この結果、最優秀賞は「松井淳+桜沢拓也」に、その他入賞作品として優秀賞1作品、佳作3作品、投票から選ばれた市民賞1作品が決定しています。今後、最優秀作品を実施案として中央通り照明灯のリニューアルを進めていきます。\*



照明灯の移り変わり



# 日本橋の地元力

高津克幸  
KATSUYUKI TAKATSU

「特集3」  
デザインする街 3

日本橋というと首都高速道路が上に架かった橋のみを考える人が多いと思う。間違いではないが、日本橋地域で日本橋の名が付く町は21町も存在する。そんな各町の歴史も名前から垣間見ることできる。

日本橋とはどのような街なのか。私は日本橋という街は“生きた歴史のある街”だと思う。どのような意味かというと、日本橋には重要文化財が幾つもあり、今も公共の場や商業の第一線で活躍している。また日本橋には数多くの老舗が街の中に存在している。ざっと数えても300年以上続く店や企業で10以上、100年以上なら50を超す。これだけの集積地は日本でも数少ないと思う。多くの地域では観光名所・遺産として残されている。しかし日本橋は違う。江戸時代から脈々と伝わり、今なお経済活動を通じて生きている。今では当たり前の商品や商売の中には、日本橋が生み出した物が数多くあるということは意外と知られていない。かつての日本橋は新しい商品や商売が生

NIHONBASHI

まれるベンチャーの街であった。なぜか。1つは魚河岸やさまざまな河岸があったこと、同時に多くの大店、金座や銀座などの金融、芝居などの娯楽や文化が日本橋に集中していたためだ。日本橋にヒト・モノ・カネが集まり、商売のチャンスや成功を夢見ている。その中から生まれた物には“味付け海苔”“玉露”、“商品券”などがある。弊社は鯉節屋なので鯉節について少し述べると、関東と関西では鯉節も異なる。江戸末期から明治時代にかけて、麹菌の一種の微生物を付けることにより熟成させ、発酵食品としての鯉節「本枯れ鯉節（ほんがれかつおぶし）」を生み出した。そして関東に広く普及し、現在に至っている。関西では発酵させる前段階で仕上げた「荒本節（あらほんぶし）」が一般的だ。鯉節でも日本の東西で異なるように、日本の食文化に日本橋の街や日本橋の商人は多くの影響を与えてきた。“ハヤシライス”も実は日本橋生まれなのは知っているだろうか。日本橋の商いは江戸時代から今日ま

たかつ・かつゆき—にんべん 取締役副社長／1970年生まれ。1993年、青山学院大学経営学部卒業。同年4月、高島屋横浜店入社。1996年、にんべん入社。大井川工場、商品部、直販営業部、流通営業部、取締役総務部長を経て、現職。日本橋室町2丁目町会長も兼務。

で、親から子へ、先輩から後輩へ、それぞれが時代を担い、伝えてきた。ある先輩からは、若かりし頃に私の祖父に世話になったという話を聞いた。江戸から明治・大正・昭和・平成まで時代の荒波を、地域で支え合い生きてきたのだと思う。まさしくこれは歴史・文化の伝承であり、今の日本で失われつつある。それが日本橋には生きている。皆が誇りを持ち、街を大切に思っている。これこそが活動の原点であり、活性力となっている。決して日本橋は敷居の高い街ではない。それは老舗も同様である。多くの人に来てもらい、知ってもらいたいと思っている。日本橋について話したくてうずうずしている。そして街に一歩足を踏み入れれば、生きた歴史に触れられる。それを形にしたのが「老舗リレーツアー」だ。これは日本橋の老舗を巡り、老舗の歴史や技・商品を味わう、ちょっとした日本橋体験旅行である。機会があれば参加してみしてほしい。老舗の考え方や歴史を聞き、技を体験することができる。

手軽に日本橋を知ることができるものとして人気が高まってきた。これを生み出したのは「日本橋活性化フォーラム」だ。メンバーは日本橋が好きで集まった人たちで、地元で商いをしている人たちと共に日本橋を良くしようと定期的に活動を行っている。これらの活動により多くの人が日本橋を訪れる機会が増え、この街や日本の良さを感じてもらえれば素晴らしい。

今後も日本橋は首都高速道路問題で注目されるだろう。将来、「日本橋」が青空を取り戻し、日本全国、あるいは世界から人が訪れる街になれるとしたら、それは日本橋だけでなく日本にとっても有益なことだと思う。地元もそれを夢見て活動を続けている。私自身は日本橋の上に首都高速道路が架かっている姿しか見たことがない。だからこそ「日本橋」の上に青空があり、日が差す姿を見てみたい。それが実現される頃には、日本橋も賑わいのある良い街として輝いていることだろう。✿



左から三井本館、日本橋三井タワー、日本橋HD DVDプラネタリウム、にんべん本店



老舗リレーツアー



むろまち小路



三井本館から三越本店を見る



無料巡回バス「メトロリンク日本橋」



日本橋



# 名橋「日本橋」の復権

永森昭紀  
AKINORI NAGAMORI

「特集3」  
デザインする街  
3



日本橋

「日本橋」は慶長8年（1603）に架けられ、翌年全国里程の起点と定められた。それ以後日本橋は、日本の中心として繁栄を続け、江戸時代中期には人口100万を超える世界一の大都市だった。この様に400年にわたり江戸・東京の繁栄を見続けてきた「日本橋」は、橋の中央に「日本国道路元標」が埋め込まれているように、江戸時代以来、現在に至るまで我が国諸街道の起点である。

そんな「日本橋」の姿が激変してしまったのが、昭和38年（1963）、翌年の昭和39年に開催される東京オリンピックのために橋の上に覆いかぶさるように建設された首都高速道路である。

そんな「日本橋」に、地盤沈下が心配される日本橋の姿が象徴されている様に感じた地元町会や商店・企業などにより、日本橋地域全体の発展を願って、昭和43年（1968）、名橋「日本橋」保存会が設立され、それ以後、名橋「日本橋」の復権と地域の活性化に対する取り組みが始まった。発足以来、橋の清掃など環境・美化を中心に組みこんでいた保存会は、昭和58年（1983）

「日本橋」の頭上に覆いかぶさる高速道路の移設を求める「よみがえれ日本橋」を決議、地域の発展を目指して活動を強化していく。

昭和63年（1988）、現在の石橋になってから77周年を祝う架橋77周年記念行事が行われ、多くの人々が日本橋を訪れた。更に平成3年（1991）架橋80周年、平成11年（1999）88周年と地域の人たちによる記念行事が、パブルの崩壊、東急百貨店の閉店（平成11年）という大きな出来事にも負けず盛大に行われ、日本橋は大変賑わった。

特に、平成11年、地元の粘り強い誘致運動が実り第75回箱根駅伝が「日本橋」を渡り、以後毎年1月3日は中央通りが10万を超える観客で埋め尽くされた。更に平成15年に行われた日本橋創架400年記念行事には15万の観客が集まり、パレードに参加した扇（千景）元国土交通大臣と、石原（慎太郎）都知事は橋上空の高速道路に言及し、石原都知事は高速道路を「野暮」と発言、地元の喝采を受けた。

こうした地元のさまざまな取り組みに合わせ、街の様相も大きく変わって

ながもり・あきのり—名橋「日本橋」保存会 理事・事務局長／1942年生まれ。1961年、芝浦工業大学附属工業高校電気科卒業。同年、三越本店入社。庶務部主任、係長、課長、マネージャーを経て、現在、業務推進部渉外担当部長。

## Show 商空間

### 室町福德塾と三井越後屋ステーション

企画・デザイン・プロデュース：北山創造研究所

日本製の日本橋を再考する

北山孝雄  
TAKAO KITAYAMA

物質的な豊かさよりも、五感に訴える体験や感動が求められるようになりました。街も建物の規模や数では魅力は計れません。その街固有の文化や歴史が感動となって街の魅力を高めていくことが求められています。

日本橋では今、日本製の街と暮らしづくりを進めています。伝統的なものから先端技術に至るまで日本には独自の魅力が数多くあります。こうした背景の中、「三井越後屋ステーション」では江戸時代の三井越後屋を街の象徴として既存ビルの外装に再現し、交流する、知る、楽しむ場を展開しました。半年間の活動後、ビル計画に伴い解体されることとなりましたが、工事期間中にも「おはようございます。ありがとう…。このまちにくらしたい、日本橋。」という街のメッセージを広く伝える場としました。続く、「室町福德塾」は日本橋の個性を掘り起こし、深めていくことを継承するものです。街の歴史の要として、9世紀に建立されたという福德神社をシンボルに、これからの日本の文化を語り、育てる街のサロンです。“街の表通り・路地”、“過去・現代・未来”、“若者・お年寄・外国人”など、分断されたものをつなぎ、複合させる役割を果たしたいと考えています。

今や“健康・美容”、“学習・創造”、“交流・娯楽”が暮らしの質を高めるための必需品です。日本橋ではここにしかない新たな賑わいと活力が生まれ、また行きたい街に変わろうとしています。\*



室町福德塾 外観（2006）



室町福德塾 内部



メッセージのあった仮囲い（2006）



室町福德塾 内部

## Show 商空間

きたやま・たかお—プロデューサー・北山創造研究所 代表／1941年生まれ。「神戸大丸界隈計画及びブロック30」、「ON AIR（渋谷）」、「函館西波止場」、「徳島市東船場ボードウォーク」、「亀戸サンストリート」、「小田急・海老名ピナウォーク」、「アスナル金山」、「横浜ベイクォーター」などのプロデュースをはじめ、多くの楽しみ・賑わい環境の開発を手掛ける。また、三重県、横浜市、広島市、うま市を始め、全国各地において公共プロジェクトにも携わる。主な著書：『まちづくりの知恵と作法』（日本経済新聞社 1994）、「北山孝雄の実践・生活プロデュース」（日経BP社 1996）、「発想の原点」（六耀社 1999）、「24365東京」（集英社 2003）、「このまちにくらしたい うするまち」（産経新聞出版 2005）など。



三井越後屋ステーション（2005）

いった。  
東急百貨店の跡地に「COREDO日本橋」がオープン、更に「三越新館」・「日本橋三井タワー」の完成と再開発も大きく動き出し、官民協働の快適な地下空間創造事業も始まり、日本橋は大きく変わり始めた。更に日本橋地域全体の活性化を目指し発足した、「日本橋ルネッサンス100年計画委員会」や、地域外の人たちも交え街の活性化を考える「日本橋活性化フォーラム」、若者の眼で街づくりを考える「日本橋学生工房」など、多くの団体が日本橋の復権を目指し協力しながら活動している。中央通りを美しい花で飾る“はな街道事業”は4年目を迎え、地域を走る無料バス「メトロリンク日本橋」は2年半で100万人の人が利用している。微生物を活用した日本橋川の浄化活動も始まった。こうしたさまざまな取り組みにより、近年日本橋を訪れる人は確実に増えている。

継続は力なり、地域の人たちが気持ちをひとつにして取り組んでいけば日本橋は必ず、千客万来の街になる。\*



上—日本橋のシンボル・麒麟  
下—日本橋の橋際に飾られた「日本国道路元標」の複製。本物は橋の中央にある



# 日本橋唯一の美術館 三井記念美術館

清水真澄  
MAZUMI SHIMIZU

しみず・ますみ——三井記念美術館 館長 / 1939年生まれ。東北大学文学部東洋美術史科卒業。神奈川県立博物館学芸員、成城短期大学教授を経て、現在、成城大学文学部芸術学科教授。2005年8月から現職。文化庁文化審議会専門委員。国立美術館・博物館、文化財研究所評価委員会委員。専門は、東洋・日本彫刻史。  
主な著書：『仏像』（平凡社 1982）、『中世彫刻史の研究』（有隣堂 1988）など。

日本橋の中央通りに面して並ぶショーウィンドーは、どれも大変華やかでお洒落です。何気なくのぞきながらしばらく歩いて、超高層ビル「日本橋三井タワー」の入口から一歩足を踏み入れると、アトリウムに高い天井が広がり、左手の階段の上に「三井記念美術館」の金色の文字が眼に入ります。

落ち着いた赤いセラミックの壁に沿ってエレベーターに乗り7階へ、といつの間にか隣の「三井本館」の中にいます。この建物は昭和4年（1929）アメリカのリヴィングストーン社によって設計され、現在、重要文化財に指定されている貴重な日本の近代建築です。展示室は、創建当初のウツの壁とほんのりとした明かりの中にガラスケースが置かれ、浮かび上がるように日本や中国陶磁の名品が展示されています。

現代感覚の世界から古美術の世界へ入る、また重厚な西洋風の雰囲気の中で東洋・日本の美術作品を鑑賞する、今風にいうならば、現代と古い時代、西洋と東洋のコラボレーションともいえましょう。

「三井記念美術館」が開館して1年と少したちました。まだ出来たての美術館ですから、まずは多くの方からごいただき、おいでいただくところからなのですが、美術館が果たす社会的な役割がこれからは益々大きくなることを思いますと、美術館が日本を支えるぐらいの気持で、積極的に活動を展開



三井記念美術館入口

## NIHONBASHI

していきたいと考えています。

幸いなことに、「三井記念美術館」が所蔵する美術作品は、三井各々が江戸時代前期から収集した、国宝6点、重要文化財21点を含む3,700点に上り、これらは江戸時代からの商家のコレクションとしては、日本で唯一のものとして残っています。そして、この三井家が最初に店を構え、以後三井グループ各社が本拠地としたのが日本橋であることを考えると、この地に「三井記念美術館」が出来たことは縁でもあり、非常に意味があることと思います。また、美術館に多くの観客を迎えることができる条件の1つに、交通の便利さがあることは言うまでもありません。この点でもJR東京駅、神田駅に近く、東京メトロ三越前駅で降りればすぐ上が美術館という、日本でも最も恵まれた場所に位置しているともいえます。

このような利点に建つ「三井記念美術館」は、日本橋の再開発と文化の保存、すなわち共存という意味からも、近年ヨーロッパ各地で高く評価されている都市と美術館の関係から見ても、日本橋の街と一体となってこそ何倍かにその意義を発揮できるものと考えていますし、日本橋という街も美術館を取り込んでこそ発展があると思います。具体的には、これまでの美術館がとかく入りやすく敷居が高かったのを、できるだけ親しみやすい、入館しやすい場所にしたいと考えております。街の商店の方々も、サラリーマンや買い物客の方々にも気軽に寄れる館、小学校や中学校と連携して生徒たちに美術教育ができる館、ゆっくりと美術品を鑑賞できる館などなどです。これからの「三井記念美術館」にご期待ください。

「日本橋の美術館に行こう」、それは「三井記念美術館」に行くこと…です。\*

## 暮らしを デザインする

### マンダリン オリエンタル 東京

設計：日本設計

「センス・オブ・プレイス」を目指す

早川千恵  
CHIE HAYAKAWA

「マンダリン・オリエンタル」のホテルづくりの根底に、“Sense of Place（センス・オブ・プレイス）＝その地の歴史や伝統、文化、人々に愛されているものをホテルに取り入れる”という理念があります。「マンダリン オリエンタル 東京」では、ホテルが立地する江戸・東京の中心、日本橋で“センス・オブ・プレイス”を実現するために、いにしえより自然を敬愛する日本人の豊かな感性を、“森と水”というデザインコンセプトで、“呉服＝ファブリック”を用いて表現する手法を採りました。



三井本館（左）と日本橋三井タワー



オリエンタルスイート リビングルーム

時代を超え今なお新しさを兼ね備える呉服に触発され、館内のあらゆるファブリック——絨毯、壁、カーテン、ブラインド、ベッドカバー、ソファ、クッション、タペストリーなど——すべて、日本の職人や工芸家を持つ伝統や最新の技術を駆使して制作されたオリジナルです。館内には、日本人の感性が、色、模様、形、質感を通して息づいています。この壮大なプロジェクトは完成までに5年余りの歳月を要しました。世界的に著名な日本人のテキスタイルデザイナーである須藤玲子氏が描き出したデザインを、日本中の織物産地の職人が、日本橋で世界中からお客さまを迎えるためのファブリックを制作して下さったのです。

私ども、「マンダリン オリエンタル 東京」は、お陰様で2006年12月2日に開業1周年を迎えましたが、これから歴史を積み重ね、お客さまに「日本橋の老舗の1つ」に数えていただけますよう精進してまいります。\*

はやかわ・ちえ——マンダリン オリエンタル 東京 コミュニケーションズ部長 / 2005年、ホテル開業準備のため入社。

## 暮らしをデザインする



オリエンタルスイート バスルーム



オリエンタルスイート ベッドルーム